



研修視察報告書

令和 2年 3月 19日

[会派名： 清風クラブ]

代表者氏名	森岡秀之 	記録者氏名	常俊朋子 
視察者氏名	常俊朋子		
視 察 日	平成 2年 2月 7日 (金) ~ 2月 9日 (日)		
視 察 先	滋賀県大津プリンスホテル内「アメニティーフォーラム 24」		
目 的	～寝たきりの障害者が、介護や接客をする未来～ 福祉施策を進める上で、一歩先を行く民間や当事者の声にふれる機会を持ち、同じ社会の構成員としての役割や、目に見えないハンディを持つ人たちにも目を向けて、一人一人がいきいきと暮らせる社会の構築に向けた取組に繋げる。		
視察	<p>障害者の皆さんの未来が、分身ロボット「OriHime」の紹介で、こんなにも変わるんだという現実には驚きを隠せませんでした。開発とその苦勞、開発者の人生、今日までの歩み、これからの課題と期待の中で進むべき方向性を模索。重度障害者の方たちの生き方が、こんなにも前向きになり、自身をもって生きる姿を見せていただいたことへの驚きでした。開発者の吉藤健太朗さんは、人と違っていたために、学校へ行けなくなり、不登校時代を長年過ごされました。でも折り紙の創作活動という得意な才能に恵まれロボットコンテストがきっかけで、ロボットの開発を通して、ご自身の変化があり、ご自身と同じように「人と繋がれないことに諦めている障害者が、このロボットを自分自身の分身として扱えるようになれば、どんなに素敵なことか!」という思いで開発されてきました。現実には、操作方法において体を動かさなくても、声を発することができなくても、このロボットを障害者に合わせた工夫で操作できるように考え、聞き取れない声を、伝えられる声に変化させ、歩けない方にもロボットを介して珈琲を運ぶ喫茶店の店員さんになれてしまうという現実を実現されています。今でも不思議に感じています。</p> <p>「あと何年、ベッドに横たわったまま、同じ空間の中で過ごさなければならないのか」と思っていた方や家族に、チャレンジできるチャンスが訪れること、これ自体の発想すら、「そうできる何かがあればいいのに」とは思っても、奇跡的なことと思っていました。実際、開発者の吉藤さんはお一人では、ここまでこられなかったとおっしゃり、様々な出会い、挫折、諦めない気持ち、成功に結びつけたご自身だけでなく、他者への思いやりがあったからこそだと思わせていただきました。障害を持っているから何もできないのではなく、障害があっても工夫することで人として新たな生き方が見え、選択することもできる。そして、誰にも何にでも諦めない気持ちさえ持てば、今まさに学校に行けない児童生徒にも、学校に行けない理由を突き止めるのではなく、どうすればその子の乗り越えなければいけないことを解決できるのか、私たちも諦めないで取組んでいけるのだと、感じられる発表でした。</p> <p>二つ目に印象に残ったのは、「医療的ケアを必要とする人への支援の最前線」の取組みでした。東松山市での取組みで、就学相談に関する規則というものが平成 19年 6月 28日に設置され、障害のある子どもの育ちと学びを支える連絡会議を行う「地域自立支援協議会」が現在立ち上げられて活動されています。東松山市のノーマライゼーションのまちづくりとして、1994年から、市長の掲げる、「生活重視・福祉優先」のまちづくりを 16年間取組み、2000年には、総合福祉エリア開設で 365日 24時間体制の相談支援、24時間ホームヘルプサービスの提供を進め、重度知的障害者のグループホームの立ち上げや、幼児期の通える施設の閉園を決め、保育園に看護師を配置して、医療的ケアを必要とする人への幼児期からの支援を行いながら、生きる喜びを分かち合える環境作りに従事されてきました。保護者との信頼関係を築き、安心して学校生活を迎えることができるような支援をするために、就学支援シートを利用した取組みが紹介されました。これは、障害の有無にかかわらず、週学区相談を行った保護者に案内がされ、希望者に実施するというものです。これに関連し、厚生労働省社会・援護局の傷害保険福祉部障害福祉課障害児・発達障害者支援室の室長 本後健さんから「医療的ケア児等の支援に係る施策の最近の動向」という題で、講演もありました。今後の教育現場の取組みと福祉施策の連携に期待する。</p>		

02.3.19
第 号